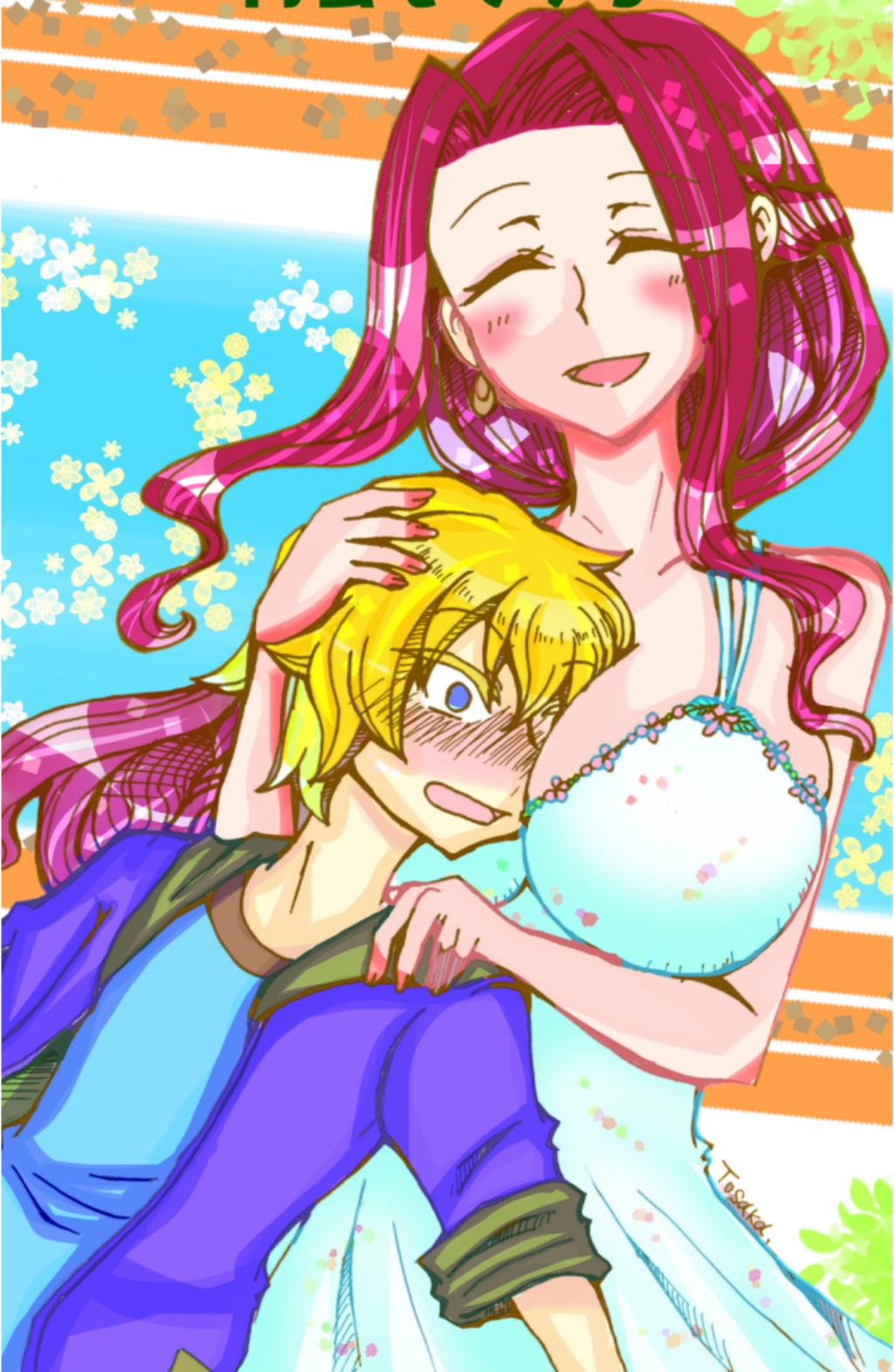


小説屋白石華

# 再会してから





再会してから

白石華

白石華

表紙・挿絵

とさか

# 目次

僕の秘密

お姉さんとの再会

誘われるまま、化粧へ

キスと確認

僕とお姉さんの気持ち

お姉さんとお買い物

お姉さんとご飯

お姉さんとお風呂でエッチ

お姉さんと、お休みなさい

70

62

48

42

34

22

14

10

7



# 僕の秘密

「……お姉さんに、なんて顔をして会いに行けばいいんだろう。」

僕は久しぶりに会う、お姉さんに会うのが戸惑いを隠せなかつた。

ぼくのお姉さん。お姉さんと言つても血が繋がつてゐる訳じやない。子供の頃、近所で遊んで貰つていたお姉さんだ。それであつて、人並みに初恋とかもしてゐたのだが、ぼくが学園に入学する辺りでお姉さんは大学生になり、そのまま離れ離れとなる。その後、お姉さんは結婚したと聞いたのだが、ぼくが大学に進学する頃、旦那さんが亡くなつた訳で。その辺りのゴタゴタは置いておこう。それで、お姉さんが独りになり、その間、ぼくは……慰めてあげたかつたのもあつてか、両親との許可も得て、大学と距離も近いし、お姉さんと同居する形で住まいを借りることとなつた。

とまあ、それだけなら、僕の甘酸っぱい思い出の続きをお姉さんの傷を癒しながら送つて貰わせる日々を送ることになるのだろうが、一つだけ、違う事があつた。

「僕……お姉さんに綺麗になつたねつて言つて貰えるかな。」



大学生を期にそういう趣味を謳歌してもいいだらうという事になり。それまでは誰にも言えなかつた……女装癖があつたのを、お姉さんだけは知つていたのだつた。と言うよりも、女装するためのおさがりの服や化粧の仕方をみんなお姉さんから貰つて教わつていたため、僕とお姉さんだけの秘密だつたのだ。

# お姉さんとの再会

再会してから

「お、お姉さん……。」

「あら、久しぶり！ 本当に来てくれたんだ。」

僕は部屋に入ると、お姉さんが出迎えてくれた。お姉さんの家は新居で、作られたばかりの家だ。確かにここに一人で住むのは何かとあるのだろう。

「えっと。うん。来ちゃつた。」

「ふふ。これからは、部屋に戻った時は『ただいま』って言つて。」

「う、うん。ただいま……。」

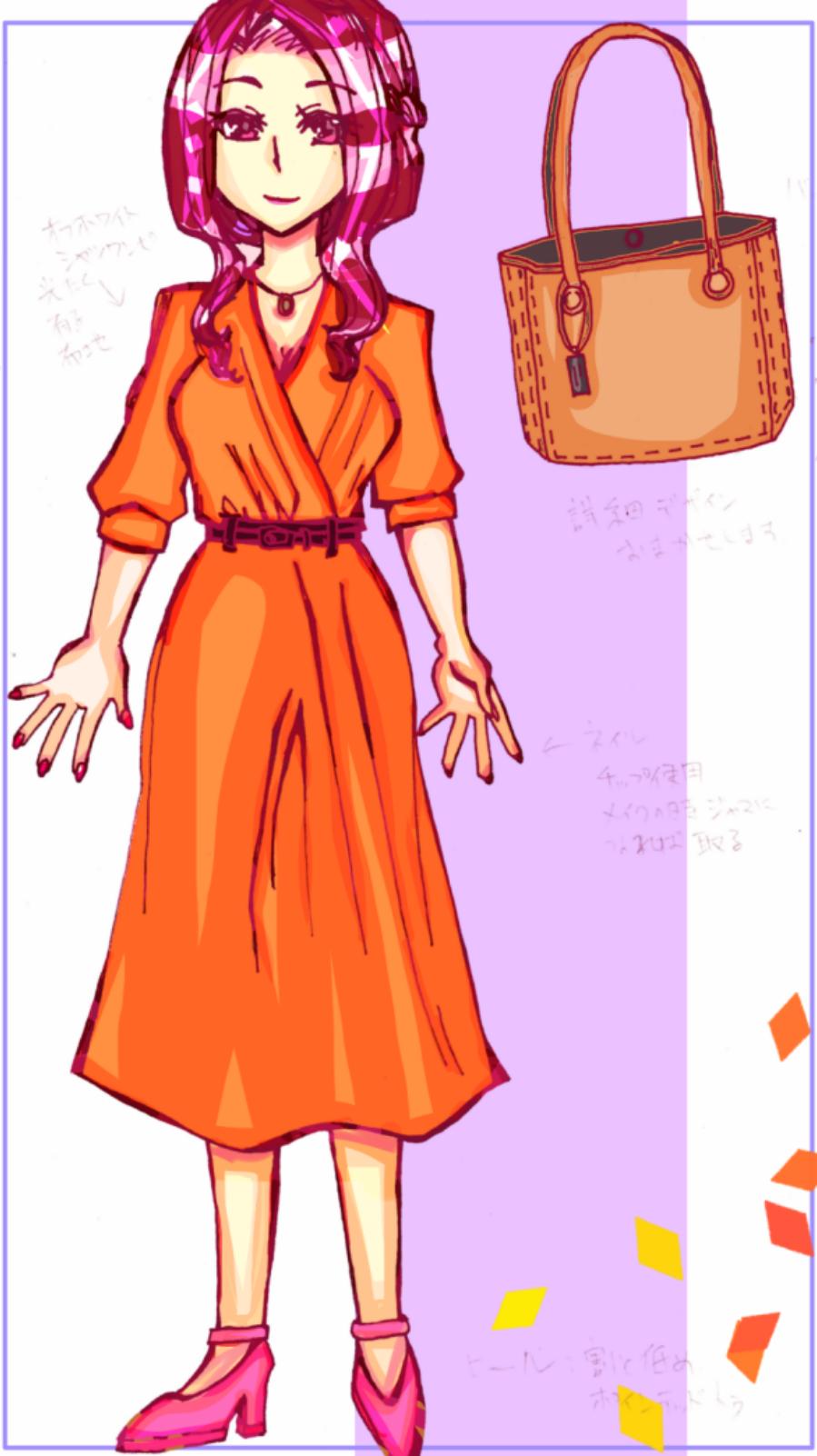
「お帰りなさい。誰も言う相手が居なくなつちゃつたから。」

「ちょっとだけ張り合いが出るの。」

「そうなんだ……。」

お姉さんは僕を見て愁いを帯びた寂しそうな眼をしていた。

「ううん、君が悲しむことじゃないのよ。それに。」



オレンジ  
ショート  
スカート  
有り  
フレア



詳細デザイン  
参考用

シルエット  
4...参考用  
スカート  
腰取り

ヒール: 富士山  
ホリ山

「あつ。」

お姉さんが僕の頬に両手を包むように当てる。

「君が来てくれたんだし、それに……。」

お姉さんがうつとりしたような表情で僕を見る。

「スキンケア、ずっとしていたのね。綺麗な肌……手にすぐ馴染むわ。」

「お、お姉さん。」

「私が君に、女の子になる方法、教えてあげたの、ずっと守つていたんだ。」

「う、うん……。」

僕が女装……きつかけは母親が化粧をする姿を見ていたのを興味深そうに見ていた時だつたが、それは女人だけがするものだと、どことなく羨ましそうに見ていたのをお姉さんに知られてしまい。お姉さんは二人だけの秘密にしようと、僕におさがりの服を着せてくれたり化粧の仕方を教えてくれたりしていた。それで僕は女装が誰にも言えない趣味になつたのだが……。

「じゃあ、女の子になつてみる？」

「そ、その前に、お姉さん、僕……僕を見てどう思う？」

「ええ、綺麗よ。とつても。」

「う、うん……。」

僕はお姉さんに言つて貰えて想定していたよりもずっと心臓がドキドキしていた。

「ね、こつちにいらつしやい。」

「うん。」

僕は鏡台のあるお姉さんの寝室に導かれていつた。

# 誘われるまま、化粧へ

「お化粧はしてこなかつたのね。」

再会してから

お姉さんが僕の顔に下地を整えながら話している。

「うん。僕、男の子だつて言つてあるのに。

女の子の姿で出入りしたら怪しまれると思つて。」

「私は構わないわよ。」

お姉さんはアツサリと僕の女装を気にしないつもりでいてくれているようだ。

僕としてはこ

れから大学にも通うようになるのだから、そんな訳にはいかないのだけど。

「それに大学生でしょ？ 通う学校も共学だし。

大学生になつたら、女装癖もある男の子つて受け入れられるわよ。」

「そういう心の広い人とかもいれば、毛嫌いする人だつているんだつてば。」

「あら。君の女装趣味つて、嫌いな人に遠慮するぐらいで隠しちゃうの？」

「ううん。ご近所さんだつてそこまで心が広いとは限らないよ。」

そういうまくいくかな。こういうのつてちょっとずつカミングアウトしていくもんじゃないのかな。僕はそう思つたが、お姉さんは僕の女装をいたく気に入つてくれているためか、とても僕の肩を持つてくれている。それは素直に嬉しいことだから。あとは僕が自分で何とかすればいいだろう。

「今のところは、僕が女装を披露するのはお姉さんの前だけでいいよ。」

「あら、言うようになつたわね。」

僕の返答に、お姉さんは随分と嬉しそうだつた。

「じゃあ、そろそろお化粧していくわよ。」

「う、うん。」

女人人がするお化粧。僕がしてもいいんだという、子供の頃に感じた、ちょっとした悪戯心と、女人人がする行為を僕がしてしまつてているという何か不思議にドキドキした気持ちと、お姉さんが僕の顔に触ってくれているという行為に、いつの間にか僕は浸つてしまつていた。そ

れは一人でそうする時にも気持ちは変わらなくて、その時の気持ちを思い返すようにしてしまった。いけないことをしているというドキドキが止まらなくなっていた。僕つてそういう事にドキドキする人間だったんだと、自分の中の願望を知つてしまつた気分にもなつた。

再会してから

「はい、まずはファンデーションからね。ちょっと厚めに塗つてみようか。」「ん……つ。」

お姉さんが指先で僕の顔に触れる。リキッドタイプから塗つているから目の回りや頬、あごの回りと塗つていかれていくが、指先でなぞるように僕の顔に触れられる感触に、何かぞわぞわした気分になつてしまふ。

「うつ。」

唇の周囲をなぞられると、動悸がしてしまつていた。

「ごめんなさい、唇は厭だつた？」

「そ、そんなことはないから続けて大丈夫……。くすぐつたかつただけ。」

「ええ。  
う……。」

今度はお化粧用のパフで頬や額を粉の方のファンデーションが付けられていく。

「あとは、コンシーラーで顔の見せたくないところを隠して。」

部分用ペンのようなもので僕の顔から浮き出てしまつていたシミなどまで綺麗に消えていつた。

「お姉さん、随分本格的なんだけど。」

「だって、人の化粧つて楽しいんだもん。」

お姉さんはアツサリ答えていたが、そういうものなんだろうか。

「その内、君にもお化粧、して欲しいな。」

「う、うん。」

「二人で歩いて、お化粧用品とかも見回つてみない？」

「い、いいけど。」

再会してから

お姉さんは随分と乗り気だつた。僕も下心なしでお誘いに乗るくらいには興味はあるし、二

人で行けば怪しまれなくなるかなという、やはり、女装に対する後ろめたさもあつたが。

「はい、今度はアイライナーね。」

「うん。」

お姉さんが僕にしてくれる化粧も整つてくると、段々、僕も乗り気になつてきた。結構単純  
なのである。

「最後は……口紅。」

「んっ。」

お姉さんが唇の先にだけ薄く塗つた口紅にグロスを塗ろうとするが。

18

「せつかくだから、グリッターが入っているのにする？」

「そうだね。」

終わる頃には僕もスッカリ、化粧に夢中になつていた。

「はい、終わり。ブレストパウダーも付けておくわね。」

「うん。」

ここまでしてもナチュラルメイクの範疇になるのだから、女人の化粧はとても時間がかかるのだろう。本当だつたら更に付けまつげやマスカラもあるのだから。アイライナーだけでも目の周りはパツチリするのだけど。

「君の場合は、ちょっと切れ長でまつげも長いし。

アイライナーだけで目元をキリつとさせたわね。」

「うな。」

「うん。男の子に生まれてきたんだから。

女装でもキリつとさせられるときはそういうのも個性にしましょ。」

再会してから

「うん。綺麗よ。」

僕の目の前にある鏡台の鏡を見て、僕を見るようにお姉さんがいう。

「ありがとう。綺麗になれたんだ、僕。」

「君は最初から綺麗だったわよ。」

「う……。」

何やら気だるいような雰囲気になってきた。

「ねえ、キスしてもいい?」

「え?」

お姉さんにうつとりした表情で見られている。

21 誘われるまま、化粧へ

## キスと確認

「えっ？ お、お姉さん？」

再会してから

ドキドキしていたのは僕だつたが、お姉さんも僕に女装させた後にうつとりした表情になつてしまい。僕を見つめている。

「君に化粧をしている時、ずっと我慢していたの。

私、君にお化粧して、女の子の着る服を着せるのに、こんなに……。」

お姉さんはぞくりとしたような身の震わせ方をすると、僕の首筋をついと撫でる。

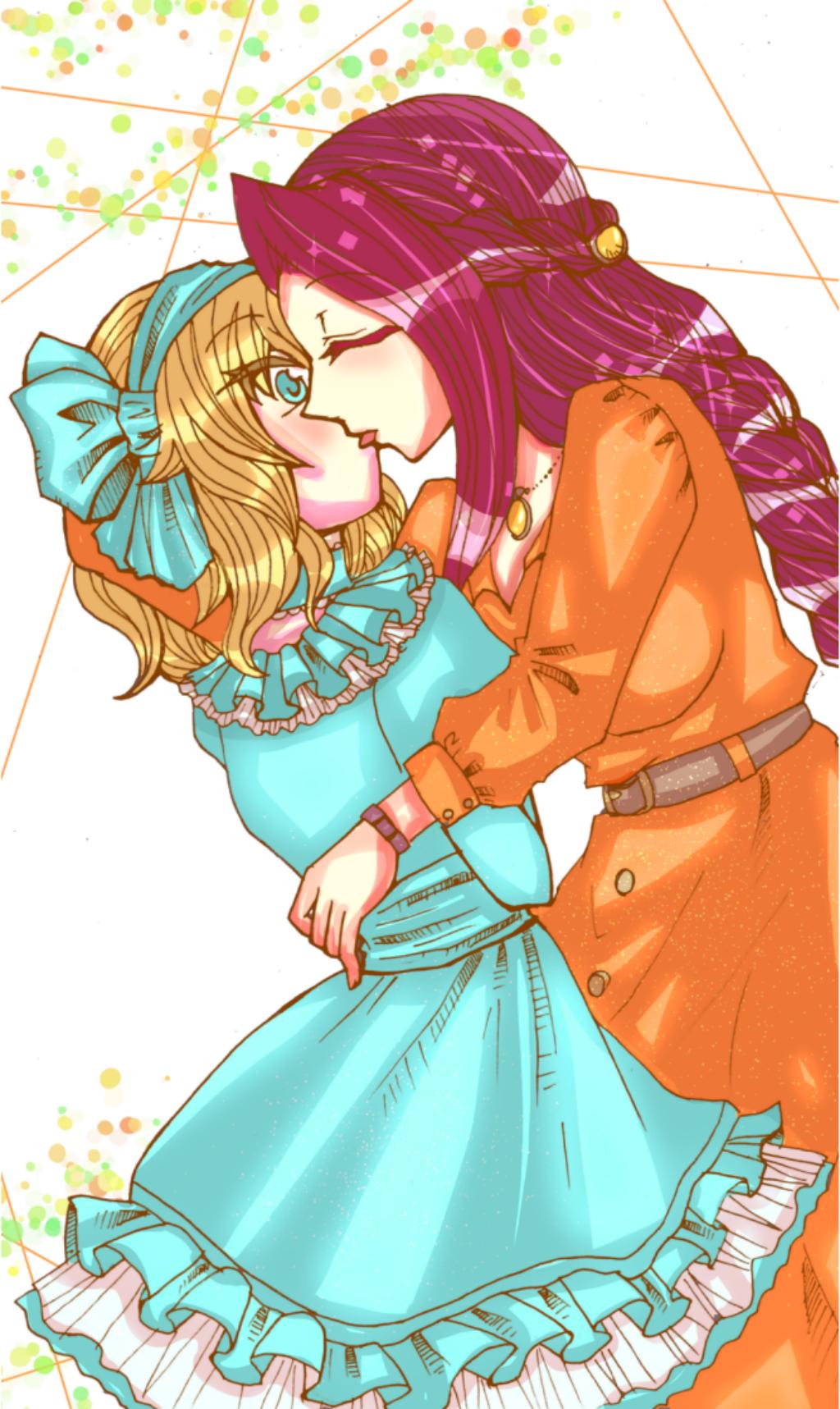
「お、お姉さん。あつ。」

お姉さんがゆっくりと僕の顔に近づけつけてくる。

「が、鏡に……映っちゃうよ。」

「構わないわ。」

「うう。」



「こんな気持ち、持つわけにはいかないから、君から遠ざかろうとしたのに。

君からこつちに来るから悪いのよ。」

「お、お姉さん？」

「ふふ、お喋りはこのくらいにしておきましよう。」

「ん……っ。」

再会してから

僕はお姉さんに唇を付けられてしまう。僕の付けていたグロスがぬめって、付けているだけでもぬるりとした感触がする。

「お、お姉さん。僕……あぶつ。」

「ちゅる……んつ、ちゅふつ。んふ……れる、ぬちゅつ。」

舌が入り込み、そのまま絡め合ってしまう。

「んつ、んつ。んぶつ。……ぶあつ。」

お姉さんが突然僕から体を離す。

「ねえ……この先はどうしたいのか、君が決めて。」

「う……つ。」

「続きをしたい、もうやめたい？ 君の気持ちも、聞かなきやね。」

「う……うう。」

このまま流れそうになつていた僕だつたが、お姉さんにこの続きを合意か否かを求められているようだ。確かに。僕はこれから、お姉さんと暮らすことになるのだから、一時の気の迷いかどうか、確かめる必要はある訳で。

「続きをしたい……です。」

「……え。」

「僕、お姉さんにして欲しい。」

「……そう、だつたの……。」

お姉さんの力が抜けていくようになる。僕にとつては、このまま流れてもよかつたことだつたが、お姉さんに聞かれてしまい（お姉さんにとつては当然のことだけど）、僕は答えてしまつ

たが、お姉さんにとってはそれが、とても意外だったようで。

26

「私の誘いを受けちゃうと、もう他の子とそうなりたいって思つても出来なくなるし。するときもこの格好なのよ？」

「それでも……いいよ。女装趣味を打ち明けられるの、お姉さんしか今の所いないし。これから大学に行くんでしょ？ 可愛い女の子はいっぱいいるわよ？」

「僕は……お姉さんがいいよ。」

「君も……そうだつたのね。それじゃあ。」

「何？」

「お洋服、着替えてみる？」

「……うん。」

お姉さんと僕は、着替えることになり。

「……ふふ。似合っているわよ。」

「お、お姉さんも……だよ。」

再会してから

白いワンピースに二人で着替えたのだが、お姉さんがサツパリとした装いに対し、僕は割と、レースとフリルが多い。更にウイッグまで身に着けているのだが、

「……可愛い。」

お姉さんが僕を見て再びうつとりしている。

「お姉さんもだよ。」

「ふふ。ありがとう。」

お姉さんも嬉しそうで。

「それじゃあ、する？」

お姉さんも僕に声を掛けるが、さつきみたいな抵抗はなさそうだった。

「……うん。」

再会してから

「君はベッドに寝て。」

「う、うん。」

お姉さんに言われるがまま、ベッドに横になると。

「わつ。」

「あら、怖かつた？ ごめんなさいね。」

衣装を身に着けたまま、スカートを捲られてしまった。

「君、ハーフパンツだったんだ。」

形としてはボクサーパンツに近いが、レディースとメンズの間のようなショーツを僕は身に着けていて。

「う、うん。見られても、大丈夫なのにしようつて。」

「今度は二人でも身に付けられるように、可愛いのを選んでみる?」

「そ、その内ね。」

「そう。なら今は。」

「あつ。」

お姉さんにパンツを脱がされてしまうと。

ぶるんつ。

「あ……つ。」

それに呼応するように空気に晒されただけで僕のものが大きくなつてしまつていた。

「お姉さんので、してあげる。」

お姉さんはそう言うと、スカートに手を掛け。

30

「わ。」

再会してから

スルスルとお姉さんが穿いていたショーツを脱ぎ、すると脚まで抜き取つてしまふと、僕のものに手を触れ、そして被せてしまふ。

「君も、おチンポに被せるのに慣れれば、どうつてことなくなるわよ。」

「あはは……そうだね。」

お姉さんは僕にそういう格好をさせてみたいらしい。

「じゃあ、しこしこ、びゅつ、て出しちやいましよう。でもその前に。」

お姉さんは鏡台に向かうと、乳液を手に取つてきたようだ。

「おチンポ、そのままじや辛いでしょ？ 濡らしてあげる。」

お姉さんは手で擦り合わせてぬちやぬちやと弄つていると、その手で僕のものに触ってきた。

ぬちつ。ぬちゅつ。

「ん……んつ、んんつ！」

お姉さんの手に包まれてぬるぬると弄られていると、僕は声が出来てしまいそうになり、耐えてしまつている。

「声……出してもいいのよ。」

「だ、だつて。ああつ！」

にちゅつ、ぬちゅぬちゅつ！

「うううううつ！ く……ああつ！」

お姉さんにショーツを被せられ、手で包まれたと思つたら扱かれてしまう。

32

「あつ、あつ。お姉さん、出しちやう。」

「出していいわよ。出して……君が白いのを出すのが見たいの。」

お姉さんは、お姉さんのショーツにピツチリと包まれた僕のを見ながら手つきがどんどん速くなっている。

「あつ、あつ。あつ。出しちやう、出しちやう！」

「出して、ホラ……私の中に。」

場所はショーツだがお姉さんは随分とノリノリだった。

「う……うううつ！」

最後は低く唸るような声を出してしまつたが、それでもお姉さんのショーツに放つてしまい。

再会してから

どくんっ。びゅくぶぶつ！

「あ……っ。」

お姉さんのショーツを白く塗り込めてしまっていた。

「……じゃあ、続きをしましようか。」

「うん……。」

お姉さんの言葉に、頷いてしまっていた。

# 僕とお姉さんの気持ち

「それじゃあ、続きをしましよう？」

「あっ、ああっ、ん……っ。」

再会してから

僕の果てたばかりの肉棒に再びお姉さんが僕が出したのが付いたままのショーツを被せ、手で扱いてしまつている。

「……ん。」

「あっ。」

びくりと震えると、僕のが再び大きくなつてしまつていた。

「……最初だから、生でしちやいましょうか？」

「えっ？」

「大丈夫。お姉さんはそういう事は自分で何とかするようにしているから。君は、エツチの事だけ意識していればいいの。」

「う、うん……。」

それって、彼女持ちの男としてどうなんだという気もしなくもないが、ここはお姉さんの言葉に乗つておくことにした。元既婚者だし、そういうのも把握しているのだろう。何とかすると言うなら、僕の知らない知識だつてあるのだろう。

「ね、それじゃあ……。」

「あ、ああっ！」

お姉さんがゆつくりと僕に覆いかぶさつてくる。女の子の格好をしたまま、お姉さんとエッチまでしてしまってるのは……服装だけ見たら僕の肉棒にだけ違和感があるが。

「……ふふ。可愛い、おチンポ。」

「ううつ。」

「大丈夫……おチンポが生えていても、君は綺麗よ。」

「うう……。」

お姉さんにそう言われるとドキドキしてしまい、僕の肉棒は本当に肉棒になつてしまふ。

再会してから

「あ……つ、あああつ！」

深く呑み込まれるようにお姉さんの中に入っていくが、きつい締まりというよりは広く、大きく、柔らかい締まりに呑み込まれていくようだつた。

「ん……つ、ああつ。」

お姉さんも僕の感触に目を閉じて受け入れているようだ。入り口でぴったりと包まれてしまふと、奥に行くと感じるのはひたすらに深く、温かく、柔らかいぬるみに覆われていく。かと思えば、抽送の刺激で蠕動を始める。

「どう？ これが私の感触だけど。思つていたよりも柔らかいでしょ？」

「う、うん。でもいいよ。僕。このくらい……柔らかくても。」

「ふふ。今は、こうしていて……。もうちょっとしたら、動いてあげるわね。」

「動くのも、お姉さん任せなんだ。」

「任せって言うか、最初はね。相性とかもあるから、君の方から動くのは……。  
もうちよつと、動かし方を知つてから。」

「なんだ。」

ゆるゆると体を動かしながらお姉さんが話し掛けてくるが。お姉さんも既にブラウスをはだ  
けているし、スカートも捲れて太腿も結合部も見えてしまつていて、お姉さんの入れられ  
ている姿を見ながら動くのを感じるだけでも、結構来てしまう。

「……ふうん、もう動いてもいいのかな？」

「えつ？」

お姉さんの表情が変わつたと思うと。

にじゅつ、にじゅつ、じゅにじゅぶつ！

「あああつ、ああつ！」

出し入れが激しくなつてくると、さつきまでの穏やかさとは一変して、お姉さんの動きと、激しさが増していく。

「んんっ、はあっ。これだと……気持ちいいけど、私、すぐ終わっちゃうから……。  
もつと君とはゆつくりしたかつたんだけど……したそだつたから、しちゃうわね。」  
「んっ、あああっ、お姉さんんっ。お姉さんんっ。僕……ああんっ！」  
「ん……っ。」

気づいたときには女の子みたいな声を出して、力が抜けるようになつて。お姉さんはそれを見ながら腰を揺すつているが、腰の動きにお腹から反るような動きが入つてくる。

「あっ……あああっ！　おチンポ……来てほしいところに来るうつ！　ああっ。  
まだ……覚えていないはずなのに……どうして……えつ。」

お姉さんは僕の首辺りに手を着くと、乳房を揺らして、反るような痙攣を続けている。

「うあっ、ああっ、はああ……ああんっ。分かんないよおっ。おチンポ出しちやうっ！」

「あ……ああっ。出して、出してえつ。君の……それ、卵子に届くまで出してえつ！」

「うあ……あああっ！」

ドクンっ、びゅぶぶぶぶっ、ずびゅつぶぶっ。びゅぶぶぶぶっ！

「あ……っ。これが、君の……。」

「うあ……ああっ。出しちやう、出しちやうよおつ。あ……っ。」

「……ん。」

「あっ。」

お姉さんが倒れてくると、横に二人で寝てしまい。その格好が……お姉さんに入つたまま。僕もお姉さんのおっぱいに顔を埋めてしまふようになつてゐる訳で。

「初めてだつたけど、君に何もかも、任せてしまいたくなつちやつたわ。」「ええと、僕、反射で動いていただけだつたのに？」

再会してから

「そうじやなかつたら、君とエツチをしたからね。」

「う……。」

世の中にあるという、女人の人好きな人とするエツチは別、というのも存在していたのかと  
僕も再び、思つていると。

「良かつたわ。自分がこんなになつちやうとは思わなかつたけど。君とのエツチでこうなれ  
て。」

「そ、それは僕もだよ。」

「ええ。これからも、よろしくね。」

「……うん。僕も、こうなつた相手がお姉さんでよかつたよ。」

「ありがとう。」

「……はは。」

この人の前ではまだ甘えてしまうところがあるけど。 いつか、かつこいい大人になれたらと、  
その時の僕は思っていたのだった。

再会してから

# お姉さんとお買い物

「今日は、君が来てくれた記念日みたいなものだから、ご飯を食べに行きましょう。」

「うん、ありがとう。」

「何か食べたいもののリクエストとか、ある？ ガツツリしたのとか、アツサリしたのとか。」

「うーん……そうだな。春だから魚とか食べたい。春魚。」

今の季節は、僕の大学進学を期に引越してきた時期だから、冬から春に変わり目の頃だつた。ソメイヨシノなどといった桜が満開とは言わないけど、ポツポツ咲いていて、早咲きの桜は既に満開を迎えていた。花見もその内、したいなと思いつつ。僕も情緒だけはいつちよ前に大人ぶつっていた。

「君つてやつぱり、嗜好は大人なのね。」

「大人といつていいのか微妙なところだけね。」

見た目は多分、姉弟のような関係で間違いないのだろうけど。そこを詰めていきたいのが僕の希望だ。それはそれとして、ご飯はうまいものを食わせて貰えると向こうが言っている時は乗るのが子供の役割だろう。魚と言えば、どういうのがあるのか。

「アンコウやブリはギリギリ食べられるけど、今の季節、鯛やヒラメも美味しそうね。美味しい漬け丼や茶漬け、アラの出汁でとつた、うどんとかあるわよ。ツマもね、野菜と海藻サラダみたいで盛り付けも綺麗なの。」

お姉さんがいきなり大人の力（うまい店を知っている）を発揮してきた。

「うん。アンコウ汁を出してくれて。

お魚も刺身かフライか、煮付けで付けてくれるところにしましょう！」

「やつた！」

という事で、お姉さんとそういうものが食べられる場所を回りながら、ついでに僕のこつちで買う生活必需品とか、あいさつ回りの物とかを買うことにしたのだが。

「花粉症のマスクミスト。」

「これはどうだろうね。」

今の季節、マスクが必需品の人などもいるだろう。お姉さんは生活雑貨店でギフトを見ていたギフトボックスを見ていた。他にもハーブティーとハチミツ、ミント製品のセットとか食べ物も置いてあるが選ぶチョイスが何と言うか、現代的である。僕にはサッパリの分野だつた。

再会してから

「こういうのは花粉症で悩んでいる人のリラックスタイムも兼ねた日用品だから。」

「そうみたいだね、見ていると。」

「あとこつち、桜のお茶とかもあるわよ。こういうのも和ハーブの一つなんだ。」

「へええ……。」

「大丈夫、つまらなくない？」

「ああ、それは大丈夫。僕の引っ越しの挨拶なんでしょう？」

「近所の人、そういうのが好きなのかな。」

「そうなの。悪いわね。」

相変わらず、お姉さんは大人の力（現代的なお土産の店を知っている）を發揮していた。

「君も何か、買いたいものはある？」

「うーん。そうだね。お姉さんこそない？」

「えつ、私？」

「うん。僕もお姉さんに何か、お返しじやないけど一つだつたら買えそうだよ。」

「まあ。」

お姉さんは随分と嬉しそうだつた。こういう時はそういう表情と反応で返すものなのか。なるほどと僕は大人の作法を見て学んでいると。

「この中で、どれがいいと思う？」

お姉さんは生活雑貨に置いてあつた小さな細工のストラップ……キーホルダーにも紐や手提げのあるバッグのアクセサリーにもなるやつだな、の中で数点、見繕つて、僕に見せている。

「持ち歩くから、君がいいと思ったのを選んで。」

「うん。」

僕は見ていると、魚、鳥、花、動物、オブジェ……よく分からぬ細工の中から選ぼうとす

(この中で、どれか一つがお姉さんがいつも身に着ける物なら、壊れにくい物のがいいかな。)

という訳で、僕は細くてもげそうな部位の少ない、壊れにくそうな細工のものを選ぶと。

「へえ。透明なキューブの中にガラスが入ってる。可愛いわね。」

お姉さんの感触も良かつた。

「これにするわ。可愛いから、どれを選んでいいか、分からなかつたの。」

「うん。良かつた。」

何を選んでいいか基準がサッパリだつた僕は、使わない頭を浪費して大分疲れた気持ちでいた。

「待たせちゃつてごめんなさいね、すぐにご飯にしましよう。」

そんな僕の顔色を見たのか、お姉さんはすぐに休ませてくれそうな場所に連れて行つてくれた。これが女性の気回しつて奴か……と僕は話さなくともエスコートしてくれるお姉さんのスマートな立ち振る舞いに感心したと同時に、僕も早いところ、そういうところを見て動けるようにならないとなと思つたのだつた。こういうのは無関心なままでいると、大人になつてから苦労するからな。

# お姉さんとご飯

「うん。美味しい。本当にツマまで美味しいね。」

「良かつた。」

「鯛の漬け丼って聞いていたから、醤油で付けたのかと思つていたけど。随分色が薄いんだね。」

僕は薄茶色よりも更に身の色が残つている漬け丼を食べていたが、それでもシツカリ調味料の味がしている。ダシのような旨味もあるし、昆布か何かでも入つているのだろうか。薬味もネギや大葉が刻んだのがあつて、付け合わせに細かく刻んだ漬物や海藻類などもあつた。何回にも分けて違う味を楽しめるようによのことだが、ここまでしてくれるのだから日本の飲食店のサービスはすごいなと思つてしまう。更にこれでアンコウ汁も付いてくるのだ。

「……ん。アンコウ汁の味も、匂いがきつくのに濃くて美味しいね。」

僕は味噌ベースになつていて、鍋野菜と生麩も入つたアンコウ汁にも口を付けたが、大振りの身が入つていて、出汁もアンコウ特有のアツサリしているのにコクのある旨味もあつて、濃厚な肝の味もして……と、アンコウの味を堪能する。

「ね」。冬になつて、こつちに来たら、やつぱりアンコウは食べないと。

といつても、私も味を知るようになつたのはこつちに住むようになつてからだけど。「地元の味つて言うのは知つていたけど。

実際、食べてみて、美味しいと思うようになるのは。

舌が鍋で煮た魚とか野菜とかが美味しいと思えるようになれてからだよね。特にアンコウの場合、魚のぶるんとした皮や内臓まで煮るから。そこで躊躇人とかもいそうだし。

美味しいって思うまでは敬遠する人とかもいるんだろうね。」

「その点、君は、大学生になる年齢でもお魚が食べたいって言つてたけど。」

「親の影響かな。魚も結構食べる所だつたからさ。刺身もワサビで食べるよ。」

「ふうん。好き嫌いつていつの間にか無くなつていくからね。」

「そうそう。自炊とかもして食べるものに苦労するようになつてくると。何でも食べられるようにしてくれた。

親のありがたみを知るようになつてくるとかそう言う。」

「自分で何でもするようになつてくると、前もつて、やれる事はあつた方がいいからね。」

相変わらず、見た目と反する渋い会話を僕たちがしていると。

「お待たせしました。デザートになります。」

「おお。ありがとうございます。」

「わあ、綺麗ですね。」

再会してから

俺たちの前に来たのはフルーツ抹茶あんみつだった。抹茶のシロップが掛けられたあんみつがとても見栄えがいい。

「日本だなー。」

「抹茶を食べていると、日本を実感するわよね。」

こんな調子で、僕とお姉さんは魚料理屋さんで日本のうまいものを堪能していた。

・・・・・

「お帰りなさい。」

「お姉さんも。お帰りなさい。」

家に戻ると、荷物を整理して、着ていたスプリングジャケットとかを片付けていた間に、お姉さんがお茶を入れてくれていた。

「疲れたでしよう？　はい、お茶。」  
「うん、ありがとう。」

リビングでお姉さんに温かいお茶を出されてしまった。こういうところまで気が利いているから、お姉さんに気付いたら甘えてしまつてはいる俺になつてはいるが、家庭内堕落の第一歩だから、これを当たり前だと思わないようにしようと気構えを持つてはいる。

(あ。いい匂い。)

お姉さんとご飯

お姉さんの出してくれたお茶が生姜と、何か香辛料の入つたいい匂いのするほうじ茶だつた。今回飲んだのはそのままだつたが。ストレートでも、ほうじ茶ラテでも美味しそうな味だ。こ  
ういうのもお姉さんが生活雑貨店で買つてくるのだろうか。

「ありがとう。ホツとする味だね。」

「良かつた。出したけど君の口にあつてて。」

「うん。目先が変わつていいと思うよ。」

僕とお姉さんはしばし、お茶の時間を堪能していると。

「ねえ、歩いてきて、疲れていない？」

「うーん。疲れたと言えば、疲れたかな。」

「それじゃあ、お姉さんと、お風呂に入る？」

「えつ。」

・・・・・。

「明るいところで服を脱いで、裸を全部、君に見られるのは初めてね。」

「う、うん……。」

お姉さんはお腹の所でタオルを自分の身体に掛けているのみでそれ以外は一糸まとわぬ姿になつてている。



「服を脱ぐと胸が垂れたりしないかいつも気になつちやつて。」

「ぜ、全然そんなことないよ。」

お姉さんは着やせの次元を超えて、服を脱ぐと、とんでもなく大きい乳房になつていて。どこに隠していたんだ。今の補正下着とか、そういう風になつてているのか。ここまで大きく膨らんでいると、大きさに圧倒されて形とか何でもよくなつてしまふ。

「やつぱり、若い子に自分の裸を見せるのは恥ずかしいわ。」

「い、いやいや、お姉さんも十分、若いでしょ！」

「そうね、年の事を気にするようになつたら余計老けるから、そうしないようにとは思つてもね。」

お姉さんは随分と気にしているが、そう言えばお姉さんつて一応、人妻だつたんだよなと改めて思う。僕の場合は大人になつたから解禁される様々な事を堪能したいから早く大人になりたいと思つてゐるし、お姉さんにも釣り合えるようになりたいと思つてゐるが、お姉さんはお姉さんで僕との歳の差を気にしているのかも知れない。自分の年齢とそれでやれる事を楽しむ

境地になれるのは、楽しいことを覚えてからなんだろうな。と思つていると。

「お、お姉さんは綺麗だから……そういうことは気にしなくていいよ。」

「あら、ありがとう。」

いつの間にか口をついて出てしまい、お姉さんも嬉しそうである。よしよし、僕も気が利くようになつてきているぞ。

「君に言われると、とつても嬉しい。」

「そ、そうなんだ。」

と思つたらお姉さんにクリティカルな返しをされてしまつた。

「ね、背中を向いて、椅子に座つて。」

「す、座るんだ。」

お姉さんに背を向けて、椅子に座ると。

再会してから

「ふにゅんつ。」

「わ、あ、ああつ。」

お姉さんに泡の付いた体で後ろから抱き着かれてしまい、手が……僕の身体の前の方に触れている。今は肩辺りで僕の鎖骨を撫でられているが、肩回りを丹念になぞつたら、今度は……胸の方とかにも触れられてしまい、頂を指先でくりくりと回すように押し撫でられている。

「お肌……とつても綺麗なのね。泡で洗うと、柔らかくて、すべすべしていくて。」

「そ、なんだ。自分じやあんまりよく……あつ。」

ちやぶんと水の跳ねるような音がしたら、僕の耳がヌリヌリと洗われていくのを感じていると。

「んつ、んんつ、あつ。お、お姉さん?」  
「……かぶつ。」

「ううつ!」

お姉さんに抱き着かれて愛撫されながら、耳を噛まれてしまった。

「ちやぶ……ふふ。」こも綺麗にしてあげないとね。」

むにゅんつ、ふにつ、くちゅくちゅつ。

「あ、あ、ああつ、お、お姉さんつ。そんなにしなくていいよおつ。」

僕はそうなるまいと思つても、声から力が抜けてしまい、フニャフニャした言い方になつてしまふ。

「ふふ、大丈夫。最後まで面倒見てあげるから。」  
「さ、最後つて? ああつ!」

再会してから

僕の乳首を両側から弄つていたお姉さんが片手だけ奥に進んでいく。お腹を撫で、おへそまで綺麗に撫でられていく。お姉さんの指は細くしなやかだから、簡単に僕の身体の深くにまで沈んでしまい。

「やつぱり……綺麗な肌。身体はとつても薄いのに、細いと不思議と惹かれてしまう……。」

くちゅんつ。

「ああああつ!?」

いつの間にかびよこんと首を出してしまつていた僕の身体の男の子の部分に触れられてしまふと、手のひらで包むようくりくりと回されて、首を完全に出されてしまう。

「あつ、ああつ、あああつ？ うあ……つ。ああつ！」

くちゅくちゅくちゅつ、ねちゅねちゅ……。

背中ではお姉さんの乳房が肩甲骨の回りまでなぞるように動かされ、前の方では乳首を撫でられながら、袋の方まで丹念に肉棒を揉み込むように洗われて、股関節回りも自分でもそこまでしないくらいに丹念に洗われていく。

「お、おねえさんつ。そこまでしてくれなくていいからつ。」

「いいえ。こういう行為だから、とつても綺麗に洗うものなのよ。」

「う、ううつ。あつ!?」

お姉さんが僕のお尻にまで触れてしまう。

「い、いやだつ、そこは……つ、ああつ。」

ちゅぼ、ちゅぼ……つ。

「大丈夫。怖がらないで……ここも、気持ちよくなれるから。」

「ううつ、うううつ、あ……つ!?」

再会してから

いつの間にか乳首を弄つていた手が僕の肉棒に触れ、ぐちゅぐちゅと扱かれるようになる。

「あつ、あつ、あああつ、あああつ、ああつ!?

で、出ちやう。おチンポから出ちやうよおつ!?」

「そう? なら……こつちも気持ちよくならないと。」

「えつ? あああああつ!?

お姉さんの指が僕のお尻の奥深くまで入り込んだと思つたら……僕のおちんちんの後ろ当た  
りのような位置で指が探るように動いていると。

「……あつた。ここが君の。」

ふにゅんとした感触がしたと思つたら、その時点では僕の意識は飛んでいた。

「ああ……あひあああ……つ。いいつ!?」

びゅくんつ。ぶしゅつびゅつ！

「あ……あつ。お尻なのに……そんなあつ。」

僕は一瞬で果ててしまい、呆然としてしまつていた。

「ちゅく……ペロッ。君も、とつても可愛かつたわよ。」

「あううう……あつ、あああ。」

お姉さんは僕の耳を舐め、抱き着いた格好で暫く僕のお尻に指を回しながら、肉棒から出し切るまで扱いていた。

# お姉さんとお風呂でエツチ

「さあ、今度は私の膝に座つて。」

「こ、今度はどうするの？」

「私の方を向いて、向かい合つてしましよう？」

「う、うん。あつ？」

再会してから

むにゅんつ。

お姉さんに抱き着くように乳房が顔と言うか首辺りに埋まるのを実感すると、その柔らかさを堪能するまでもなく、顔に埋められてしまう。

「んつ、んんつ。」

僕の身体はあつという間に反応してしまい、また大きく首を出してしまう。

「お姉さんも、準備は大丈夫だから……入っちゃいましょうね。」

「う、うん……ああつ。」

んちゅつ。

粘着質な感触がしたと思ったらお姉さんの中に僕のが入り込んでしまう、と同時にお姉さんにお尻を両側から掴まれてしまい、僕の身体が掲げられてしまった。

じゅくつ、じゅくつ、じくつ。

「あつ、ああつ、お、お姉さんんつ。からだ、動いちやうよおつ。」

「いいの、最初は動きを覚えて……これが、私の気持ちいい速さと動きだから。」

「う、うううつ。ああつ。」

いつの間にか僕まで腰を動かしてしまい、それに合わせてお姉さんの腰も動いている。

「んあつ、ああつ、やつぱり君……感じている時の顔も可愛い……つ。」

お姉さんはいつの間にかお姉さんの乳房に顔を埋めている僕の顔を見ながらうつとりした表

情でいる。片手が僕の頭の方に来たと思うと優しく撫でるように抱きしめられてしまい。

「お、お姉さん？ あああっ！？」

にじゅうう……つ。

もう片方の手でお尻を掴むように握られると、割れ目の方から指を伸ばし、アナルフツクをするようにお尻を指で吊られてしまう。

「ああああっ、ああっ！？ お、お尻はいやあッ！？」

僕は女の子のような声を出してしまい、お姉さんにお尻を揺すられながら腰を振つてしまう。

「ね……つ、このまま出しちゃいましょう？」

「いやあっ、ああっ、ああっ？ あ、あ、ああっ。お尻でいくの、覚えちやうよおつ！

お尻が……つ、壊れちゃうよおつ。」

「いいの……出したくなつたらいつでもいいのよ。おチンポ、パンパンでしょ？」

「う、うん。おチンポ、パンパンだよおつ、出しちゃう、出しちゃうううつ。」「ほら、出して……。」

にゆりつ。

お姉さんが再び、僕のお尻の中でお尻の中でお尻の壁に当たるとアナルフックのような形で入り込んだ指をぐりんと回されてしまった。

「ああああっ！　あああっ！　出ちやうううっ！」

びゅくんっ、びしゅびしゅびしゅっ！

「あ……あっ、また、出しちゃった……お尻なのに。」

「いいのよ、いっぱい出して……私の寂しかった子宮に、君の精液が入ってくれるなら……。きつと卵子も喜んでくれるわ。生きていることを思い出させてくれるって……。」

「……なんだ。」

お姉さんが最初からこういう行為をさせてくれるのって、つまりはそういう事なのだろう。喪失した経験が無いから僕には想像力を巡らせることしかやれないが、今、僕とお姉さんがしているのは、新しい命を育む行為だつたのだと、僕は改めて行為について思つてしまつていた。

・・・・・。

ちやぶんつ。

「お、お姉さん。入る時も前からなの？」

「ええ。そうすると、抱つこになるでしょ？」

それから。僕とお姉さんでお風呂に入つたのだが。お姉さんに前から抱き締められるように、お姉さんが湯船に座り、それに乗るように僕が入ることになつてしまつた。

「お、お姉さんつ。どうしてこんな……恥ずかしいよ。」

「大丈夫、君はとつても可愛いわ。」

「うう……つ。」

いつの間にかまた、お姉さんの乳房に身体が埋もれるようになつてしまい、頭を撫でられ、もう片方の手でシツカリ背中を抱きしめられているからとても柔らかい感触を味わうようになつてしまつている。

（僕、こんな生活を毎日続けていて、堕落しない自信がない。）

既に当初の、かつこいい大人になるという決意が揺らいでしまつているが。

「……ふふ、可愛いわね、本当に。」

お姉さんの嬉しそうな表情を見ていたら、何もかもを流し去つてしまいそุดだから本当に洒落にならない。

「お、お姉さん。僕は……こう見えて、かつこいい大人になりたいんだけど。」

精一杯、かつこつけた表情でお姉さんを見ると。

「やだもう、本当にかわいいんだから！」  
「うわっ。」

お姉さんに抱きしめられてしまった。

「お、おねえさん……やめてよおっ。」

僕は声が出てしまうと。

「ねえ、君。」

「うん。」

「君も、かつこいい大人になりたくても、あんまり無理はしないでね。」

厳しくしようとしても、それで自分の体と心は傷つけないようにして。  
そうすれば、他の人にも優しくなれるようになるから、そうしてあげて。  
そのために、家では甘えられる人がいるんだから。」

「……うん。」

「君が甘えて、癒された分、また、元気になれるようになれば。君の元気な姿を見て、それで元気になれる人だつてているの。」

「そうなんだ。」

「そうよ。私がそだから。それを頭の隅にでもいいから入れておいて。」

お姉さんはやつぱり、そういうところでも僕よりも経験はずつと先にしているんだろう。触れていいのか分からぬからそのままでいる。

「明日は、あいさつ回りが終わつたら、お化粧して、外に出てみましょうか。」

「で、出ちやうんだ。」

お姉さんは相変わらず、僕のそういうところまで気に入つてしまつていていたようだつた。

触

# お姉さんと、お休みなさい

「わあ、似合うわよ。」

「う、なんだ。」

僕はボクサー・パンツに近いパンツは穿いたままなのだが。そのインナーに重ねるようにドロワーズ、ブラジャーライクの丈のキャミソールのようなインナー。更にそれに羽織るようにフォーコロア調の、ひらひらしてフリルもレースも付いているけど、現代的にシンプルになつたネグリジェのような、前開きのワンピースのような服を着ている。ドロワーズを穿いているから、裾がふんわりと広がるようになつっていた。ちよつとだけドロワーズの裾も覗いている。頭にもリボンのついたヘアバンドのようなのを巻いている。

「男の子がそういう格好をするのって可愛いわ。」

「へ、へー。」

「ええ。とっても似合つているわ。」

「う、うん。」

お姉さんが僕をべた褒めしているが、悪い気はしなくて、しかもちよつと、ドキドキしてい

る僕。

71 お姉さんと、お休みなさい

「最後は、お姉さんのピローミストを布団に掛けて。」

「あ、いい匂い。」

石鹼のような淡い匂いでふんわりと癒されていると。

「今日は疲れたでしょ、お姉さんと寝ましょ？」

「うん。」

僕はお姉さんの言葉にさつそく乗ってしまい、布団に入ると。

「パジャマに着替えて、二人で布団に入るのって久しぶりね。」

「そうだね、お姉さんに化粧を教えて貰った時、以来かな。」

「そうね。あの頃から君は綺麗だつたわ。」

「お、お姉さん。恥ずかしいよ。」

「いいの……私はあの頃から、君に持つたら許されない感情を持っていたと思つていたから。」

お姉さんは僕を懐かしい目で見て いる。

再会してから

「今日、私と行為をしたけど、大丈夫だつた?」

「大丈夫つて言うか、よく分からないま、終わつちやつたから。凄く、気持ちよかつたのだけは覚えているけど。」

「……そうね。私も、君には……甘えちゃつているのかかもしれないわね。」

「そうなの?」

「ええ。君がここに来て、私が思うようになつてしまつて。」

「それは……あんまり気にしなくていいよ。僕もお姉さんの負担になつていなかなつて。」

「そうなんだ。」

「そうだよ。いいよ、このくらいだつたら。」

「ふふ、ありがとう。」

う。

お姉さんはお姉さんで僕の接し方を気にして いたようだ。それは……僕としては、僕の方が甘えすぎだと思つていたから意外だつたが。そこで僕が図に乗つてしまつたら墮落の一歩だろ

「そんなことを言つていたら、もつとすごいことをしちゃおうかしら。」

「え!? あれよりもつと、すごいことつてあるの!?」

「あるわよ。していいつて言うならしちゃおうつと。」

僕はお姉さんの底知れなさに驚いていたが。

「……ちよつとずつ、だからね?」

「ええ。ちよつとずつね。」

その言葉にドキドキしてしまったのを気付かれないように、照れるように答えてしまつてい  
た。

# 再会してから

2022年 3月26日 初版

## 奥付

発行 白石華

著者 白石華

イラスト とさか

本書の無断複製、複写、転載を禁止します。

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

(<http://tokimi.sylphid.jp/>)